

近世後期における補助動詞テモラウ

— 上方語・江戸語の対照 —

山口 響 史

キーワード：東西差，テモラウ，迷惑タイプ，サセテモラウ

1. はじめに — なぜ上方語・江戸語の差異に着目するのか —

補助動詞テモラウは、中世末期の狂言資料から用例が見られるようになる。

(1) 爰にお目をかけらるゝ先達のござる、是へ参て、よひ事かあしひ事か、うらなふてみてもらはふと存る（狂言、虎明本、上422）

テモラウの歴史的な研究については、宮地（1975）や荻野（2007）等が存する。しかし、いずれも授受動詞及び授受補助動詞を包括的に観察した研究であり、テモラウ個別の歴史についての記述が十全にはなされていなかった。そこで、山口（2015）では、中世末期から近世後期までのテモラウの調査を行い、近世後期資料から見られる「迷惑タイプ^(注1)（次節で詳述）」及び「サセテモラウ」の成立について考察した。但し、山口（2015）の調査では中世末期から近世後期までの資料を当時の上方語を反映すると考えられる資料に統一している。上方語資料に統一することは、地域的な断絶無く、言語史を記述できるという点で必要なことである。一方で、近世後期（宝暦～寛政期）以降、中央語としての地位が江戸語に移っていくことを考えれば、現代共通語への、より連続的な歴史の構築を視野に入れた中央語史の記述のために、江戸語の様相を記述することも必要である。また、テモラウを含めた授受動詞については、現代語研究において地域差があることが明らかにされている（尾崎2013、日高2007他）。テモラウの東西差を見逃すことはできない。

そこで、本稿では近世後期以降のテモラウの歴史についてより精確に把握するため、上方語と江戸語の比較を行う。まずは、次節で山口（2015）において得られた上方語の観察の結果を補足しつつ再確認し、その上で比較の観点を確認する。次に、第3節では、第2節で得られた観点を基にして、上方語の用例と江戸語の用例の比較を行う。第4節では、観察された現象についてまとめ、上方語・江戸語の比較において見られた相違についての考察を行う。

2. 上方語におけるテモラウの概要

2.1 用法の確認

上方語の様相を確認する前に、用法を確認しておく。中世末期から近世後期までの上方語におけるテモラウの歴史を記述した山口（2015）では、意味的な観点で見ても、テモラウの用法を大きく以下の二つに分けた。

- ・受益タイプ…テモラウ文の主語にとって前接動詞の表す事態が望ましい事態である用法。

例、私は太郎に誕生日を祝ってもらった。

- ・迷惑タイプ…テモラウ文の主語にとって前接動詞の表す事態が望ましくない事態である用法。

例、私は太郎に誕生日を祝ってもらっては困る。

さらに、この用法分類と関わって、以下のような分類を設けた。

- ・A'タイプ…受け手（テモラウ文の主語）が事態の生起に対して事前に働きかける用法。自分にとって望ましくない事態を働きかけるとは考え難いため、多くは受益タイプとなる（但し、次節で述べるマイを後接するタイプは除く）。

例、（彼に頼んで）誕生日を祝ってもらおう。

- ・B'タイプ…受け手（テモラウ文の主語）が事態の生起に対して事前に働きかけない用法。受益タイプ、迷惑タイプのいずれもB'タイプになり得るが、迷惑タイプは、全てB'タイプとなる。

例、（突然）誕生日を祝ってもらった。

また、統語的な観点からも以下のような分類を設けた。

- ・派生関係…テモラウ文の主語が前接動詞の動作対象とならない用法。^(注2)

例、私は誕生日にケーキを作ってもらった。

- ・交替関係…テモラウ文の主語が前接動詞の動作対象となる用法。

例、私は太郎に殴ってもらった。

以下、これらの分類を踏まえて、山口（2015）の観察結果を再確認する。

2.2 中世末期の成立から近世後期までの様相

前述したように、補助動詞テモラウは、中世末期資料である大蔵流「虎明本」か

ら用例が見られる。^(注3) 成立当初は、現代と比して用法が限られていた。以下にその用例(2)と用法の特徴(3)を示す。

(2) よささうなお仏をつくつつもらはふと存る(狂言、虎明本、下135)

(3) テモラウ成立初期(中世末期)の特徴

- a. 意志・願望表現との結びつきが強く、受け手が事前に事態の成立を働きかける用法(A'タイプ)に限られる。
- b. 前接動詞は他動詞^(注4)に限られる。
- c. 派生関係に限られる。
- d. A'タイプであることと連動して、受益タイプに限られる。

例えば、上記の(2)では、話者(受け手)が仏を作る動作主と与え手として「仏を作ってもらおう」としている文脈であって、受け手が与え手に依頼等の行為を通して働きかけることで事態が生起するA'タイプである。テモラウ文の主語となる受け手が自ら働きかけることが、自分にとって望ましくないこととは考え難い。この事前に働きかけるという、当時の本動詞モラウの語彙の意味(当時のモラウは「乞い求める」意として解釈できた)から保持されている特徴は、テモラウにおけるいわゆる「受益」の意味に連続していると考えられる。

また、(2)の前接動詞「作る」の項を見ると、動作主は与え手であって、受け手は前接動詞「作る」の対象物とならない(「与え手」が「仏」を作る)派生関係である(3c)。この特徴も、A'タイプと同様本動詞モラウに由来するものであると考えられる。すなわち、成立初期のテモラウにおいては、対象物の授受行為を伴う例が多かった(山口2015の調査では、中世末期の18例中15例83.3%)。この時、テモラウに前接する動詞の対象物が、授受行為の対象物となる。従って、テモラウ文の主語(受け手)は対象物とならない。つまり、本動詞モラウにおける対象物の授受行為という制約が成立初期のテモラウには保持されていたと考えられる。

一方で、受け手が事前に事態の成立を働きかけない用法(B'タイプ)は、成立から遅れて近世前期頃見られるようになる(4)。これに伴って、意志・願望表現との結びつきも薄れ、条件節での使用も見られるようになる(5)。また、受け手が前接動詞の事態の直接の受け手(対象物)となる、交替関係の用例も近世前期頃見られるようになる(6)。これら近世前期のテモラウの様相は、本動詞モラウの「乞い求める」意味の希薄化、及び、テモラウがより文法的な形式となる(対象物の授受行

為を伴わなくなる) 変化として理解できる。

- (4) ア、仰山な。涼みがてらに紙鳶見に出た、太鼓、鉦が入らうとは、朔日早々、
祝うてもらうて忝い(近松、心中刃は氷の朔日、266)
- (5) 廓の衆を頼んでこちらから避けてもらうたらば、根性も取り直し、人間にも
なろうかと(近松、冥途の飛脚、132)
- (6) この恥かいて助けられ、なんと生きてゐられう。慈悲なら斬つてもらはう
(近松、丹波与作待夜の小室節、379)

さらに、近世前期には、受益タイプだけでなく、テモラウ文の表す事態が受け手にとって望ましくないものと考えられる用例(「迷惑タイプ」)が見られるようになる。受け手が事前に事態の成立を働きかけないという点において、「迷惑タイプ」はB'タイプの一部といえる。但し、「迷惑タイプ」はテモラウ文全体の意味解釈上の区分、「B'タイプ」はテモラウの意味と連動する運用上の条件であって、それぞれ独立である。(4)のように、B'タイプかつ受益タイプの例もある。近世前期の「迷惑タイプ」には、マイを後接する単文の例(7a)のほか、マイを後接せず複文となる迷惑タイプも1例見られた(7b)。

- (7a). 門には大勢人ばかり、客の邪魔してもらふまい(近松、長町女腹切、467)
- b. 一もん共も笑ふである其上に娘に迄すねてもらふはぜひがない。(紀海音、八百やお七、217)

これらは、前接動詞の表す事態が受け手にとって望ましくない事態であるという点で、前代までの受益タイプとは異質である。但し、ここで注意しておきたいのは、(7a)のようにマイを後接する単文型の用例が、近世後期以降顕著となる、テモラウが条件節内に生起し複文を構成する、典型的な迷惑タイプとは異なり、A'タイプに近い側面も認められることである。例えば(7a)では、前接動詞の表す「客の邪魔をする」こと自体はテモラウ文の主語にとって望ましくない事態である。従って、通常は、テモラウ文の主語が前接動詞の表す事態の生起に対し、事前に働きかけるものとは考えにくい。働きかけがなければ、B'タイプと考えることができる。しかし、(7a)のような用例は、打消しの意志表現マイを後接する。この点では、望ましくない事態を予測し、未然に防ごうとして、受け手が事前に事態に働きかけているといえる。意図通り防ぐことができれば、それは意味的には「受益」となる。この点において、マイを後接する単文型の(7a)のような例は、A'タイプとも位置

づけられる。一方(7b)は、前接動詞の表す事態も、主節の「ぜひがない」という表現からも、B'タイプ且つ「迷惑タイプ」といえる。

上記の近世前期の過程を経て、近世後期には、条件節にテモラウが現れる複文型の「迷惑タイプ^(注6)」が見られるようになる(8)。この複文型の「迷惑タイプ」では、前接動詞に状態や変化を表す自動詞が見られる(8a)(8b)点にも注目できる。

- (8)a. モシお家さん、あんたからサウくづれてもらい升と、内証の事が世けんへしれて、わたしの身にかゝり升。(上方、滑稽本、諺躰の宿替、65)
- b. おまへらがひよろ／＼してもらふと、わたしの身が立ところがないよつて(上方、滑稽本、諺躰の宿替、65)
- c. モシ茄子一つでも夢に見てもらふたら、大事の代ものに疵が付。(上方、噺本、時勢話綱目、85)
- d. ソフ大ごへに言てもらふてほどふも御近所の手まへ外聞かたゝ／＼じやマアしづかにして下され(上方、滑稽本、穴さがし心の内そと、447)

さらに、これらの状態や変化を表す動詞を前接する例(8a)(8b)では、テモラウ文の主語が前接動詞の表す事態に参与しない。また、B'タイプであるために、テモラウ文の主語からの働きかけもない。すなわち、近世後期の段階において、上方語では、受け手が事前に事態の成立を働きかけ、前接動詞の表す事態の(直接的であれ間接的であれ)参与者として捉えられる用法から、受け手が事前に事態の成立を働きかけず、前接動詞の表す事態に参与しない(いわば、テモラウ文の主語にとって望ましい事態であれ望ましくない事態であれ受け手への事態の帰結だけに着目する)用法をも表せるようになったと捉えられる。

ここで近世後期上方語の複文型の迷惑タイプに関する補足をしておく。近世後期上方語の複文型の迷惑タイプの例(8)を見てみると、現代共通語とは様相が異なることが指摘できる。現代共通語では、山田(2004)が「テハなどの接続助詞を伴って現れ、後件に「困る」など話し手の感情を表す表現などが来る」と述べるように、複文型の迷惑タイプの使用において一定の傾向が見られる(9)。とりわけ、本稿における現代語の調査では、接続助詞は「ては」に偏っていた^(注7)。一方で、近世後期上方語に見られる複文型の迷惑タイプでは、後接語を見ると「たら」2例、「ては」2例、「ても」1例、「と」1例であり「ては」への偏りは見られない。さらに、主節述語の「困る」「迷惑」「嫌」等への偏りも見られず、条件節のテモラウ文の結果、

どのような帰結になるのが主節において具体的に述べられる。これらの点で、近世後期上方語の複文型の迷惑タイプ（成立初期の迷惑タイプ）は、現代共通語の迷惑タイプの特徴と異なる。^(注8)江戸語の様相を確認しつつ、どのようにして現代共通語の様相に至ったのかについて明らかにする必要があるだろう。

- (9)a. そのようなことをしてもらっては、こちらが困ります。（火浦功、『ハードボイルドで行こう』）
- b. 彼らと自分たち水主を同等に扱ってもらっては迷惑であるとしている。（樋口和雄、『信州の江戸社会』）
- c. 日本の捕鯨と一緒にもらったら困る（川端裕人、『クジラを捕って、考えた』）

さらに、近世後期上方語の特徴として、サセテモラウの例(10)も見られるようになることが挙げられる。近世後期上方語のサセテモラウの例(10)では、受け手の意志を表す例(10a~e)が多く見られることが指摘できる（7例中5例）。

- (10)a. わたしハとらやのおまんやへよめ入さしてもらひますハへ。（上方、噺本、臍の宿かへ、289、再掲）
- b. 今のうちに、アノ風呂屋の湯さんにひかしてもろて、銭とりでもさしてもらをかしらんテ。（上方、滑稽本、諺臍の宿替、107）
- c. アノ私しや妾宅になりましたらのせの妙見さんや春は伊勢参りもさしてもらふはへ（上方、洒落本、十界和尚話、192）
- d. 山のおちらへ嫁入して、聳さんにたのんで、いつ日も／＼てらやを休ましてもらひますハへ（上方、噺本、臍の宿かへ、289）
- e. わたしハ小間物屋へよめ入して、べつこうのかんざしをたんとさしてもらひますハへ。（上方、噺本、臍の宿かへ、289）
- f. これへ旦那かたより、でつち衆がお使に来て、あまりねぶたさに、妾宅にてしばらくねさしてもろふてる所へ（上方、噺本、落噺千里藪、134）
- g. 時に三番入さしてもらひませにや、どふもなりません（上方、噺本、落噺千里藪、136）

サセテモラウ文では、ス・サスがテモラウに前接することで、動作主が受け手となる。従って、サセテモラウを用いずとも、動詞単体の意志形でも同じ内容を表現

することができる。上記の受け手の意志を表す例(10a～e)では、動詞単体の意志形で表す場合に比して、与え手の使役行為（ス・サス）や受け手の受益（テモラウ）を明示的に表現することになる。近世後期上方語では、この明示的な表現方法が確立していることも大きな特徴である。

以上、上方語におけるテモラウの概要を確認した。本稿で江戸語と比較する近世後期の段階では、以下の特徴が見られる。

(11) 近世後期上方語におけるテモラウの特徴

- a. 条件節にテモラウ文が使用される複文型の迷惑タイプが見られるようになる。このタイプでは、主節においてテモラウ文の主語にとって望ましくない帰結が述べられる。
- b. サセテモラウ（交替関係に含められる）が見られるようになる。
- c. 状態や変化を表す自動詞も含めたあらゆる動詞を前接動詞とするようになる。

この近世後期の様相を踏まえ、次節では、迷惑タイプ（とりわけ複文型）の有無、サセテモラウを含めた前接動詞を主な観点として江戸語と比較する。

3. 近世後期江戸語と上方語との比較

3.1 複文型の迷惑タイプ

3.1.1 複文型の迷惑タイプの有無

本節では、近世後期江戸語のテモラウについて、近世後期上方語のテモラウと比較していく。

まずは、複文型の迷惑タイプの有無について確認する。近世後期江戸語に目を向けると、複文型の迷惑タイプの例を見ることができる。

(12) コウよしねへ延喜がわりいわな。泣てもらつちやア近頃気の毒だ。(江戸、人情本、春色梅児誉美、81)

しかし、調査の範囲内で確認できる例は、上記の(12)のみである。一方で、上方語では、江戸語に比べ、複文型の迷惑タイプの例が多く確認できる（表1）。

表1 受益タイプ・迷惑タイプ別用例数

		受益タイプ		迷惑タイプ		総計
		単文	複文	単文	複文	
上方	洒落本	5	6			11
	噺本	10	10		1	21
	滑稽本	21	28		6	55
江戸	洒落本	10	5			15
	噺本	20	11			31
	滑稽本	39	14			53
	人情本	18	21		1	40

近世後期において複文型の迷惑タイプは、主として上方で用いられる表現であったと考えられる（用例は前掲(8)）。

3.1.2 複文型の迷惑タイプに関する要素

前項において、上方語・江戸語における迷惑タイプの有無について確認したところ、江戸語では、迷惑タイプが僅かにしか見られないことが分かった。それでは、江戸語において迷惑タイプの成立に関する文法的な条件は整っていたのだろうか。前述したように、近世後期に見られる迷惑タイプの特徴としては、テモラウ文の主語が事前に働きかけないB'タイプであること（近世前期の例は(4)）、統語的な要素として多くの場合条件節にテモラウ文を含むこと（近世前期の例は(5)）が挙げられる。そこで、複文型の迷惑タイプに関わる各条件について、江戸語の様相を確認する。

まずはB'タイプの存否について見ていく。上方語においては、先にみたように近世前期からB'タイプが見られた（上例(4)）。江戸語においても、以下の例(13)のようにB'タイプの例が見られる。但し、意味解釈の上では「受益タイプ」である。

(13)a. 彦さんも私についちゃア何だのかだのとお金を遣つてゐますし借金まで拂つて貰つちや彦さんはいゝにした（江戸、人情本、春色恋廻染分解、初31ウ8）

b. てめへに指を切てもらつたとて、黒焼にして、むしぐすりにはなるめへし、しほをつけて焼いてもくはれねへ。（江戸、洒落本、総籬、381）

また、江戸語にはテモラウが条件節内に出現した複文型も見られる。ただし、こ

れも意味解釈上は「受益タイプ」となる。

(14)a. 神がくしになつたのでございますから、生死はわかりません。占て貰つたら生居るとは申しましたが（江戸、滑稽本、浮世床、337）

b. ある人の出生の男子、おさな名を非人に付てもらへば、そく才延命也と聞て、早く非人をよび寄る。（江戸、噺本、無事志有意、192）

つまり、江戸語においては、上方語で迷惑タイプに大きく偏るB'タイプ、そして複文型が運用される文法的な条件は整っていたものの、いずれも受益タイプでの使用に限られていたと見ることができる。

3.2 前接語

次に前接語について比較する。上方語では、近世後期から状態・変化を表す自動詞が見られるようになり、ス・サスを前接したサセテモラウも出現した。そこで、近世後期江戸語の前接語についても動詞を自他と使役助動詞に分けて調査する。調査の結果を以下に示す（表2）。

表2 前接語一覧

		他動詞	自動詞	アスペクト	使役助動詞	総計
上方	洒落本	9	1		1	11
	噺本	14	2		5	21
	滑稽本	47	6	1	1	55
江戸	洒落本	14		1		15
	噺本	31				31
	滑稽本	41	9	3		53
	人情本	29	7	2	2	40

3.2.1 使役助動詞—サセテモラウの有無—

まず、使役助動詞の有無に着目したい。表2より、上方語では、7例見られたサセテモラウが江戸語では以下の(15)の2例のみしか見られないことが分かる。この2例のうち、以下の(15a)では、「よりを戻らせる」となり、被使役者が対象物と一致する。これは、他動詞を前接するテモラウに意味的・統語的に近い特徴である（「よりを戻す」という他動詞で表される事態が前接するテモラウ文と意味的・統語

的に非常に類似した内容を表す)。従って、サセテモラウという形態的な特徴だけではなく、意味的（使役の意味である「ある動作を行うように仕向けること」）・統語的（被使役者が二格となること）にも「使役の助動詞+テモラウ」という特徴を持つサセテモラウの例は、江戸語において(15b) 1例のみしか見られないことになる。一方で、上方語では、(15a)のようなサセテモラウは見られず、全例で被使役者が対象物と一致しない。受け手が被使役者（前接動詞の動作主）となる(15b)のような例である。

- (15)a. 只三吉が可愛そうで戻るよりならもどら[□]してお貰ひ申たいとぞんじました（江戸、人情本、春色恋廻染分解、初53オ8）
- b. コレ手めへを骨を折てそだてたのはな、老躰て寐酒の一盃づゝも吞[□]てもらはふと思ふから（江戸、人情本、春色辰巳園、405）

3.2.2 状態や変化を表す自動詞、アスペクト

次に、使役助動詞以外の前接語に目を向けてみる。前述したように、サセテモラウの成立は、テモラウにおける前接動詞の取り得る範囲の拡大の一つと位置付けられ、テモラウの意味機能の拡張を表す現象といえる。この拡大において、近世後期の上方語では、(8)のように状態や変化を表す自動詞、さらには(16)のように動詞テイル形（アスペクト）を前接する例が見られるようになっていた。そこで、江戸語においても、変化や状態を表す自動詞等が前接し得るかについて確認したい。

- (8)a. モシお家さん、あんたからサウ[□]くづれ[□]てもらい升と、内証の事が世けんへしれて、わたしの身にかゝり升。（上方、滑稽本、諺躰の宿替、65、再掲）
- b. おまへらが[□]ひよろ[□]／＼[□]し[□]てもらふと、わたしの身が立ところがないよつて（上方、滑稽本、諺躰の宿替、65、再掲）
- (16) サア奎兵へさんも竹七さんも、[□]しつかりしてゐ[□]てもらはぬと、今がわたしの大事のところてムり升ぜ。（上方、滑稽本、諺躰の宿替、65）

江戸語でも、(17)のように、状態や変化を表す自動詞の前接する例が確認できる。また、上方語の例(16)と同様、アスペクトが前接する例(18)も見られる。

- (17)a. 庄兵衛ちよと下に[□]居[□]て貰かい（江戸、滑稽本、浮世床、294）
- b. お前に特みが有ト言なア外でもねへ、情合に[□]成[□]て貰ひてへのだ。（江戸、滑稽本、七偏人、1013）

- (18) 手がふさがつてゐるゆへ、もつてゐてもらつて、三くち四くちのむ（江戸、洒落本、傾城買四十八手、396）

その他の自動詞の例において、江戸語では、基本的に(19)のような動作を表す動詞を前接する例が多く見られる^(注9)点が特徴的であるものの、前接動詞の拡大に関しては、上方語と大きく違いは無いと考えられる。

- (19)a. 少し西の方へよつてもらへ（江戸、噺本、戯忠臣蔵噺、211）
b. 今日は直と、千葉の宅へ這入てもらふ相談をと、来かゝる爰への庭傳ひ（江戸、人情本、春色梅児誉美、219）
c. 何卒お前様と夫婦になつて幾末和合暮してお貰ひ申たうございます（江戸、人情本、春色恋廻染分解、五6オ4）

3.2.3 派生関係・交替関係

最後に、交替関係の例が江戸語においても見られるかについて確認しておく。交替関係は、上方語において近世前期には見られ、サセテモラウ成立初期の全例で見られた特徴である。

江戸語でも、(20)のように、交替関係の例が確認できる。

- (20) 次郎さん、ととても世話ついでに、おめへの心安い医者さまを頼んでくんなせへ。先爰で見てもらいてへもんだ。（江戸、滑稽本、花暦八笑人、195）

この点において、上方語、江戸語における大きな差は見られない。従って、江戸語においても、本動詞モラウにおける「対象物の授受」の意味からは離れ、文法的な形式としてテモラウが確立していたと考えられる。

4. まとめ—東西差の把握—

以上、近世後期の上方語、江戸語におけるテモラウの比較を行った。比較の結果、次の点が観察できた。

I 意味的な側面

- (i) 複文型の迷惑タイプが、江戸語では僅かにしか見られず、上方語にまとまった例が見られる。
(ii) 受益タイプのB'タイプは上方語・江戸語いずれにも見られる。
(iii) 複文型の受益タイプは上方語・江戸語いずれにも見られる。

II 前接語の拡大

- (i) サセテモラウは、江戸語では僅かにしか見られず、上方語にまとまった例が見られる。上方語の例では、受け手の意志を（特に言い切り形で）表す例が多い。
- (ii) 状態や変化を表す前接動詞、アスペクトの前接は、上方語・江戸語のいずれにも見られる。

III 構文的な側面

- (i) 交替関係の例は、上方語・江戸語のいずれにも見られる。

以上の違いを見ると、とりわけ I (i) (複文型の迷惑タイプの有無) と II (i) サセテモラウの有無が上方語と江戸語で大きく異なる部分であるといえる。以下、詳しく見てみよう。

I (i) (複文型の迷惑タイプ) は、江戸語において人情本の1例しか見られなかった。このことを踏まえると、江戸語においては、上方語に比して迷惑タイプが後れて成立したと考えられる（江戸語では単文型は見られない）。但し、江戸語においては、B'タイプ、複文型における受益タイプは観察できた。すなわち、近世後期江戸語においては、上方と異なり、「受益タイプから逸脱しない」という制限が強かったといえる。人情本の1例は、江戸語における迷惑タイプの萌芽とみることができよう。

II (i) サセテモラウについても、江戸語では人情本の1例のみしか認められなかった。江戸語においては、サセテモラウも上方語に比して、後れて成立したと目される。但し、II (ii) III (i) が示すように、江戸語のテモラウ文においても、前接語は状態や変化を表す動詞やアスペクトへの拡大が認められ、交替関係の例も見られた。前述したように、状態や変化の動詞の表す事態には、テモラウ文の主語（受け手）が参与しない。また、交替関係の例は、テモラウが本動詞モラウの表す対象物の授受行為から離れたことを示す（2節で述べたように、派生関係は本動詞モラウにおける対象物の授受行為の意味に伴う特徴だった）。すなわち、江戸語においても、テモラウは、主語に対する事態の帰結としての受影を表示する文法形式といえる（但し受益の制限が強い）。従って、上方語、江戸語のいずれにおいても、テモラウは本動詞の意味から離れ、文法的な形式として確立していると捉えられる。サセテモラウのみが江戸語において遅れたことについては、別の視点、例えば、矢島（20

16) の指摘する東西の表現指向^(注10)を考慮することが必要かもしれない。近世後期上方語のサセテモラウは受け手自らの意志を表す際、他者からの受影として表現することで配慮表現として機能していた。サセテモラウが能動文でも同じ内容を表現できることも踏まえれば、各地域の配慮表現の要請の大小を視野に入れる必要があるだろう。

以上、近世後期におけるテモラウの東西差について、迷惑タイプ、サセテモラウの存否を中心に観察・考察した。現代共通語においては、上例(9)のように「～テモラッテハ困る」という類型に偏在する複文型の迷惑タイプ、そしてサセテモラウ、サセテイタダク文の運用が顕著に見られる。江戸語から東京語へ、近代から現代にかけての両者の拡大が予測される。とりわけ、サセテモラウについては、明治・大正期において使用が広がっていくことがすでに確認されている（伊藤2015）。一方で、サセテモラウ、サセテイタダクが戦前の東京には存在せず、京阪語から東京語へ流入した言葉であるということ指摘も夙になされている（大石1973、岩淵1978他）。近代以降も東西差について着目し、テモラウの記述を進める必要がある。今後の課題としたい。

注

- 注1 山口（2015）では、前接動詞の表す事態がテモラウ文の主語にとって望ましい例を「受益型」望ましくない例を「迷惑型」とした。しかし、本稿では、意味的な分類であることを重視し「受益タイプ」「迷惑タイプ」と呼ぶ。このことに伴って、山口（2015）では、「単文タイプ」「複文タイプ」とした統語的な分類を本稿では「単文型」「複文型」と呼ぶ。
- 注2 前接他動詞において、二項動詞（斬る、食べる等）ではヲ格、三項動詞（見せる、教える等）ではヲ格とニ格を動作対象とした。
- 注3 本稿においては、「前接Vの主語≠モラウの主語」の用例を補助動詞テモラウとして扱う。
- 注4 動詞の自他について、山口（2015）では、ヲ格を要求するものは他動詞、それ以外は自動詞とした。本稿もこれに準ずる。
- 注5 山口（2015）では、近世前期の「迷惑タイプ」がマイを後接する単文型に限られるとしたが、他の資料に目を向けると(7b)のような複文型の迷惑タイプの例も見られた。
- 注6 山口（2015）では、前接動詞の表す事態がテモラウ文の主語にとって望ましくないものを「複文タイプの迷惑型（本稿では複文型の迷惑タイプ（注1））」とした。しかし、

呼称に「迷惑」を含めたものの、テモラウ自体が「迷惑」の意味を表すとは考えない。すなわち、複文型の迷惑タイプにおいて、「迷惑」の解釈となるのはあくまで主節でテモラウ文の主語にとって望ましくない帰結が述べられるからである（「あなたから崩れてもらう。」のように単文型のテモラウ文であれば受益読みとなる）。従って、テモラウ自体が「迷惑」を表しているのではないと考えられる。つまり、「迷惑タイプ」とは文全体で見た際の呼称である。テモラウは、基本的に「受益」となるが、これについてもあくまで、事前に働きかけるということ（A'タイプであること）が結果的にテモラウ文の「受益」の意味に解釈されると考える。逆にB'タイプであれば、事態の帰結がテモラウ文の主語にとって望ましい結果であるとは限らなくなる。

注7 迷惑タイプの例を現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）で全ジャンルを検索すると、「たら」7例、「ては」61例、「ても」13例、「と」5例であった。さらに、これらの迷惑タイプの用例の主節を見ると、「ては」では全例、「たら」では7例中6例、「ても」では13例中11例、「と」では5例中4例が「困る」「迷惑」といった話し手の感情を表す表現が見られた。

注8 現代共通語では以下の例のように、迷惑タイプか受益タイプか判断に迷う例も見られる。

・顔も見えない遠くから、ぼんやりした声をかけてもらっても、こっちとしては有り難さ半分、迷惑半分（久世光彦、『女神』）

テモラウは、元来、主語が事前に働きかける事態を表していたことから基本的に受益を表す表現であるので、話者（受け手）としては有難いものの、前接動詞の事態が成立した帰結は望ましくない、ということもあり得るのである。基本的に受益を表すテモラウが文全体で迷惑の意味を表し得たのも、このように結果として受け手にとって迷惑であるという事態があり得ることを端緒として考えられる。

山口（2015）では、迷惑タイプ成立の原理について説明が不足していた。以上の説明を本稿にて補っておきたい。

注9 近世後期における上方語、江戸語で見られた自動詞について、以下にまとめておく。

上方語：行く、いぬ、くずれる、来る、しっかりしている、つきあう、ひよろひよろする、惚れる、

江戸語：行く、居る、かかる、勝手元をする、気を付ける、暮らす、来る、苦勞する、喧嘩する、情合（いろあい）になる、立つ、出る、飛び込む、泣く、這入る、妬く

注10 矢島（2016）では、上方語、江戸語の表現指向をそれぞれ「共有指向性／説明・打診型」「一方向性／主張・提示型」として説明する。上方語に見える「共有指向性／説明・打診型」とは、事実に対して「話者がどう評価・認識するかを説明し、それが聞き手にも共有され得るかどうかを打診して確認する」方法であり、江戸語に見える「一方向性／主張・提示型」とは、「事実に対する認定情報を一方向的に主張し、聞き手に提示する方法」であると述べる。本稿で見られた上方語における特徴的な表現（複文型の迷惑

タイプ、サセテモラウ)も、この表現指向に沿うものであることは見逃せない。

使用文献

- 中世末期：*大塚光信・岡見正雄編『抄物資料集成』清文堂出版*大塚光信編『続抄物資料集成』清文堂出版*土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』岩波書店*大塚光信・来田隆編『エソポのハプラス 本文と総索引』清文堂*福島邦道解題『天草版平家物語(上)(下)』勉誠社*北原保雄・池田廣司『大蔵虎明本狂言集の研究(本文篇上・中・下)』表現社*北原保雄他『狂言記の研究』勉誠社
- 近世前期：*歌舞伎台帳研究会編『歌舞伎台帳集成第1巻』勉誠社(心中鬼門角)*海音研究会編『紀海音全集』清文堂(おそめ久松袂の白しほり、傾城三度笠、心中二ツ腹帯)* (椀久末松山、八百やお七、三勝半七二十五年忌)『日本古典文学全集』小学館*武藤禎夫・岡雅彦編『噺本大系7、8』東京堂(軽口出宝台、軽口機嫌囊、軽口瓢金苗、軽口浮瓢単、軽口腹太鼓、軽口福徳利)*鳥越文蔵・山根為雄・長友千代治・大橋正叔・阪口弘之校注訳『新編日本古典文学全集 近松門左衛門集①・②』小学館(世話物24編)
- 近世後期上方：*武藤禎夫・岡雅彦編『噺本大系8、9、11、14、16』東京堂(軽口片頬笑、軽口大黒柱、時勢話綱目、新撰勧進話、臍の宿かへ、落嘶千里藪、噺の魁二編)*洒落本大成編集委員会編『洒落本大成2、4、13、16、17、18、27』(新月花余情、郭中奇譚(異本)、短華薬業、酔のすじ書、十界和尚話、南遊記、北川蜆殻、色深狹睡夢)中央公論社*近代語学会編『近代語研究 第四集』武蔵野書院(穴さがし心の内そと)*武藤禎夫編『江戸明治百面相絵本八種』大平書屋*武藤禎夫校訂解説『諺臍の宿替』大平書屋
- 近世後期江戸：*水野稔校注『日本古典文学大系59黄表紙洒落本集』岩波書店(遊子方言、辰巳之園、軽井茶話道中粋語録、卯地臭意、通言総籬、傾城買四十八手、青樓昼の世界錦の裏、傾城買二筋道)*武藤禎夫・岡雅彦編『噺本大系』岩波書店(御伽噺、仕形噺、富来話有智、気のくすり、寿、葉羅井、千年草、詞葉の花、無事志有意、塩梅余史、馬鹿大林、福種蒔、落咄臍くり金、東都真衛、無塩諸美味、一雅話三笑、駄路馬士唄二篇、身振噺寿賀多八景、落咄熟志柿、落咄屠蘇機嫌、落嘶屠蘇喜言、東海道中滑稽譚、はなしの種、新作可楽即考、百面相仕方ばなし、しんさくおとしばなし、落嘶笑種蒔、春色三題噺初編、梅屋集)*中村幸彦校注『日本古典文学大系64春色梅児誉美』岩波書店(春色梅児誉美、春色辰巳園)*浅川哲也編『春色恋洒染分解翻刻と総索引』おうふう(春色恋洒染分解)*稲垣正幸・山口豊編『柳髪新話浮世床総索引』武蔵野書院、中野三敏・神保五彌・前田愛校注『日本古典文学全集<47>洒落本・滑稽本・人情本』小学館(浮世床)*中野三敏・神保五彌・前田愛校注『新編日本古典文学全集80洒落本・滑稽本・人情本』小学館(酩酊気質)*神保五彌校注『新日本古典文学大系86』岩波書店(浮世風呂)*日本名著全集刊行會編『滑稽本集』(妙竹林話七偏人)*小池藤五郎校訂『花暦八笑人』岩波書店(花暦八笑人)
- その他：岩波書店*日本国語大辞典第二版編集委員会編(2003)『日本国語大辞典 第二

版』小学館＊国立国語研究所コーパス開発センター編『現代日本語書き言葉均衡コーパス』
(中納言バージョン 2.2.2.1) (2017年3月18日確認)

参考・引用文献

- 伊藤博美 (2015) 「近代以降の謙譲表現における受影性配慮について—「お／ご～申す」「お／ご～する」「させていただきます」—」『近代語研究第十八集』武蔵野書院
- 岩淵悦太郎 (1978) 『日本語対談』筑摩書房
- 大石初太郎 (1973) 座談会「現代敬語の問題点と敬語の将来」『現代の敬語 敬語講座6』明治書院
- 荻野千砂子 (2007) 「授受動詞の視点の成立」『日本語の研究』第3巻3号
- 尾崎喜光 (2013) 「“道理に合わない”授受表現の使用と動態」『現代日本語の動態研究』おうふう
- 日高水穂 (2007) 『授与動詞の対照方言学的研究』ひつじ書房
- 宮地裕 (1975) 「「やる・くれる・もらう」の発達の意味について」『鈴木知太郎博士古稀記念国語学論攷』桜楓社
- 矢島正浩 (2016) 「否定疑問文の検討を通じて考える近世語文法史研究」『日本語史叙述の方法』ひつじ書房
- 山口響史 (2015) 「補助動詞テモラウの機能拡張」『日本語の研究』第11巻4号
- 山田敏弘 (2004) 『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法—』明治書院

(やまぐち・きょうじ／名古屋大学大学院・日本学術振興会特別研究員DC)